

登山報告書

●目的地：北鎮岳（2244m）旭岳（2291m）

●期日：2019年5月3日（金）～6日（月）

●目的：ピウケナイ沢周辺の斜面を滑る

●参加者

L：丸谷 聖一 63歳

M：皆川 幸治 63歳

M：武藤 清秀 66歳

●行程

3日（金） 旭岳温泉ロープウェイ集合、天候待ち（8：45～12：20）＝娑見駅（12：40）＝旭岳石室（13：10）BC

4日（土） BC（6：30）＝ピウケナイ沢（8：40）＝北鎮分岐（10：40）＝北鎮岳（11：00）＝ムシの沢滑降（11：10～11：40）＝鋸・比布コル（12：30）＝リクマン滑降・登返し（12：40～13：50）＝ハタコロ下（14：30）＝石室BC（16：10）

5日（日） BC（8：30）＝ニセ金庫岩（11：40）＝北大スロープ（11：45～12：00）＝北大スロープBC跡c1900（12：00～13：10）＝旭岳（14：30）＝地獄谷滑降（14：50～15：05）＝BC（15：30）

6日（月） BC（8：30）＝盤の沢追悼現場（8：50～9：10）＝旭岳温泉（9：25）解散

●実際の行動

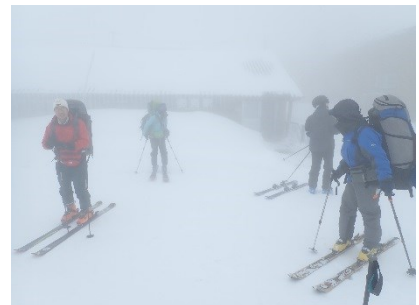
3日（金）ミゾレ後雪、濃いガス、気温-5～0℃程度

武藤・皆川両氏は前日に帯広の拙宅入りして、ささやかな前夜祭を敢行。畜大山岳部OBの後藤さんが飛び入り参加。

丸谷車にて、帯広5：30出発。旭岳ロープウェイ8：45着。天人峡分岐を過ぎると道路面はシャーベット状態で冬の様相を呈する。片倉Pの4人は既に到着していた。それぞれ再会の握手をしながら、始発ロープウェイを待つも、風が強く天候待ちでロープウェイはなかなか運行してくれない。

ここから歩く気はさらさらないので、天候が回復傾向にあることを信じ、ひたすら待っていると、12時20分にロープウェイ運航開始。この時間帯で中岳温泉まで行くのは厳しいので、片倉リーダーとも相談し、計画を変更し、石室付近をBCとすることとした。

娑見の駅からはガスで全くのホワイトアウトの中、GPS頼りで石室着。BC設営して初日の行動は終了。



4日（土）快晴、無風、山頂付近は10m程度の西風、気温10～15℃で暑い

これ以上望むべくもない程の快晴に恵まれ、ピウケナイに向かって2パーティー合同で歩き出す。ほぼ夏道上。尾根筋も積雪がありトラバースに支障はほとんどない。

ピウケナイc1800mの二股で片倉Pと別れ、北鎮岳へ向かう。当初詰める予定の沢はc1900mで急な段差（夏は滝か？）となっているため南側を大きく迂回しながら中岳と北鎮分岐のコルに当てる。この風が一番強かった。風速は15m位か。

北鎮岳も含め全般に西斜面は融雪が進みハイ松や岩が露出しているが、東や北斜面はまだ積雪が残っている状態。北鎮に向かう夏道稜線も雪が無いので、東面を巻くようにしてスキーで登頂完了。黒岳方面を見ると山全体が黒々としており、もはや夏山の雰囲気だった。

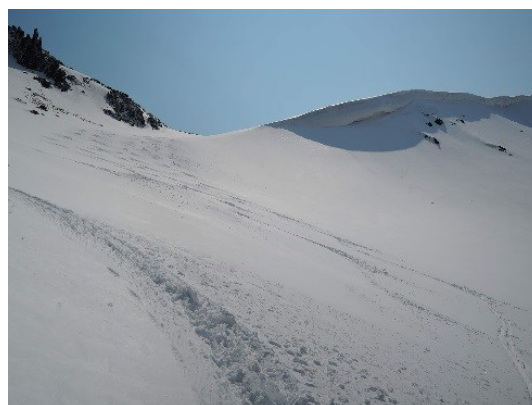


登山報告書

HUSVフラッグ（武藤氏、金沢から持参）とともに北海道No2北鎮岳で記念撮影。強風を避けるようにムシの沢に突入。ピーク付近はアイスバーンだったが、標高が下がるにつれ表面の雪が緩み快適な斜面となった。比布と鋸のコル下までスキーでトラバース、50mlほど登って比布・鋸のコルに到着。



ようやく、本山行最大の目的であるリクマンのドロップポイントにたどり着いた。鋸の岩峰群を右手に、比布岳からの巨大雪庇を左手に見ながらの滑降を開始する。午前中の北斜面は雪の条件も良く、どんどん高度を落としがちだが、登り返しの体力を温存するためc1890mでストップした。



登り返し1時間が辛かった。さらに比布岳まで登る元気もなくなってきたので、比布岳南面をトラバースしてc2000mでハタコロに進入した。ピウケナイ沢に着くと山スキーや5人組やハタコロで超ロングターンのを決めていたボーダー2人組とすれ違う。

ピウケナイからはシールを付けず、旭岳の北西山麓c1700m付近を4kmひたすら歩いて、1時間半で石室BCに到着した。愛別アタックを終え既に帰還していると思っていた片倉Pの姿はどこにも見当たらず、当惑する。色々と思案しているうちに尚三と連絡が取れ、あと小一時間程でBCにつくとのこと。17時過ぎには全員顔を揃えることができ、それぞれの今日の成果に祝杯をあげる。

終日ピカッ晴れで顔が焼ける。

5日(日)快晴、弱風、気温15°C前後で暑い

昨日のフル行動で全員お疲れ気味。メインは懐かしの北大スロープを滑ってBCで昼寝をむさぼること。昼寝の時間から逆算して、BCを8:30出発とする。スキーでじわじわ登りc2070m夏道付近で大休止する。その間、ロープウェイ駅から吐き出された登山客が我々を追い越していく。通過する登山客に何か目を引くものがあれば、話しかけ、色々と情報を仕入れる単なる迷惑おじさん集団に成り下がってしまっていた。とにかくやる気がないのだ。30分経過。

なんとかニセ金庫岩に到着。いよいよ懐かしの北大スロープにスキーを踏み入れる。いい斜度、滑る雪、滑っても滑ってもオングルにたどり着かない長大スロープ。ここはスキー天国なのだ。



ようやく、テントサイトのオングルにたどり着き、行動食と昼寝を決め込み、ハイマツの上に寝転んでみる。ジントニックの香りが鼻を刺激する。とうとうやってきた。

眼下に高根ヶ原から忠別岳、遠くに王冠のトムラウシ、そのはるか右手にオプタテから富良野岳に連なる真っ白な十勝連峰が望まれる。この懐かしい景色を見るために、ここにやってきたのだ。

1時間ほど、ポッターとしていると山ガール2名がスキーとボードで降りてきた。なかなかの足前だ。聞くと仙台の山岳会に所属しているらしく、この連休を利用して、十勝方面や旭岳周辺を滑りまくっているらしい。片倉Pの牧野とも間接的に知り合いとのこと。なぜ、こんなピンポイントで出会うのか世間は狭い。オングルにて『部歌』と『スキ一の寵児』と『僕らのふるさと』を歌う。



登山報告書

さて、登り返しの時間です。延々と北大スロープを登り、旭岳ピークを目指す。ニセ金庫のテラスで小休止、最後の登り90mにと取り付く。シール直登ギリギリの斜度で、片倉さんがズリズリと足元が滑って後退し左側にこける。『金具がはずれた〜』と比較的大きな声で叫んでいたけれど、特に問題ないなと思い、皆ピークを目指し黙々と登り続ける。

6名がピークについて休憩していると、やや遅れて片倉さんがやってきた。ちょっと、恨めしそうな顔をしている。話を聞くとどうやら、『金具が外れた』ではなく『肩が外れた』と叫んでいたらしい。叫んでも誰も止まってくれない悲しさに、打ちひしがれて歩いているうちに、肩もはまって何とかピークまでたどり着いたということでした。合掌。

本山行最後のピークでの記念写真を撮り終えて、ピーク北側の2250のガレ場から地獄谷にエントリーする。かなりの急斜面で雪も緩んでいるため慎重に降下する。大きな岩峰の脇をすり抜けるスリリングなシュートスキー的な雰囲気がある。谷のど真ん中から噴煙脇もすり抜けて姿見へ抜け、観客がいれば拍手がおきそうなスキーコースだ。

山で最後の晚餐はパーティー合同で豪華なジンギスカン丼だ。急遽作成した雪炬燵に全員座って旭岳に見守られながら、食事やお酒や会話を楽しむなんと大人な雰囲気。



6日(月)快晴、無風、気温10°C前後で暑い

入山4日目。下山日となった。余ったエッセンを朝食にして、帰り支度をはじめ8:30に下山開始。30分余りで、盤の沢追悼現場に到着。昭和47年11月、雪崩で亡くなった後藤次郎さん、及川俊一さん、星野信男さん、瓜生純さん、川上真さんから5名の冥福を祈り黙禱。部歌と僕らのふるさと無意根小唄を歌って追悼終了。スキーコースに戻ってロープウェイ山麓駅に向かって滑り出す。

3泊4日というOBパーティーには長い山行でしたが、天気に恵まれ、目的とするピークや斜面を楽しむことができ、なんとも贅沢で楽しい時間を7人で共有できた事がたまらなくうれしい。世代を超えて楽しめる山スキーに**Schi Heil!**

